

富谷市次世代型図書館づくりに向けた 市民参加ワークショップ事業報告書



富谷市

平成29年3月

目次

1. 本事業の趣旨と目的.....	1
1.1. 本事業の趣旨.....	1
1.2. 富谷市総合計画前期基本計画(案)における図書館の位置づけ.....	2
1.3. 本事業の目的.....	4
2. 議論全体のまとめ.....	5
2.1. 利用者.....	5
2.2. 目的.....	5
2.3. 次世代型図書館に求められる役割.....	5
3. 【参考資料】次世代型図書館づくりに向けた市民参加ワークショップ報告書.....	8
3.1. ワークショップとは.....	8
3.2. 市民参加ワークショップの位置づけ.....	8
3.3. 開催日程及び会場.....	8
3.4. ワークショップのテーマ.....	9
3.5. 参加者.....	9
3.6. 第1回市民参加ワークショップ プログラム.....	10
3.7. 第1回市民参加ワークショップ 議論のまとめ.....	12
3.8. 第2回市民参加ワークショップ プログラム.....	16
3.9. ストーリーボード.....	17
3.10. 第2回市民参加ワークショップ 議論のまとめ.....	17
3.11. 広報活動.....	21
3.12. お知らせ.....	22
3.13. 報告.....	23
3.14. メディア掲載.....	24
4. 【参考資料】富谷市の図書館を考えるシンポジウム報告書.....	25
4.1. 開催日程及び会場.....	25
4.2. シンポジウムのタイトル.....	25
4.3. 当日のプログラム.....	25
4.4. 登壇者.....	25
4.5. 参加者.....	27
4.6. 講演内容.....	27
4.7. 次世代型図書館とは.....	31
4.8. 広報活動.....	32
4.9. メディア掲載.....	32

5. 添付資料.....	33
5.1. ストーリーボード	33

1. 本事業の趣旨と目的

1.1. 本事業の趣旨

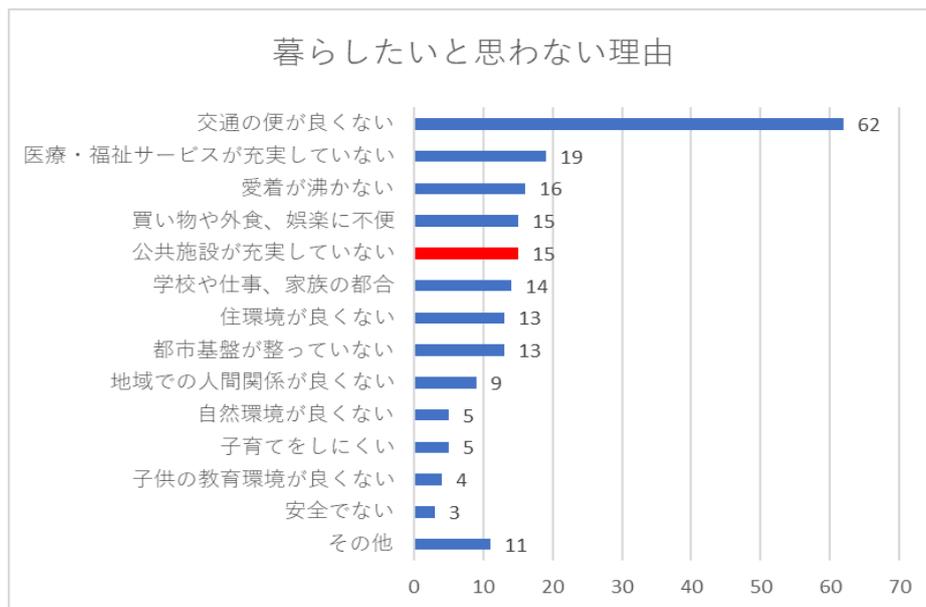
平成 28 年(2016 年)10 月 10 日(月)に富谷町から富谷市への市制移行を完了させました。

市制移行のためには地方自治法および宮城県が定めている「都市的施設その他の都市としての要件に関する条例¹⁾」にある要件を満たす必要があります。

地方自治法にある「人口が 5 万人以上であること」は平成 27 年(2015 年)に到達し、その後も増加の一途をたどることから要件は十分に満たされています。

宮城県条例の中には文化施設についての要件も記されています。市にふさわしい要件として「公私立の図書館、博物館、公会堂又は公園等の文化施設を二以上有すること」があげられています。富谷市には図書室を併設する公民館 6 館、地域公園等があるため要件は満たしています。

しかし図書館設置への住民の期待は、市が行った調査結果の数字として表れています。平成 28 年(2016 年)5 月に富谷町(当時)がおこなった「富谷町まちづくりアンケート～富谷市総合計画策定に関する住民意向調査～²⁾」の集計の中で、「富谷町で暮らしたいと思わない理由」の 4 番目に「公共施設が充実していない」ことがあげられました。



〔出典〕富谷市「富谷町まちづくりアンケート集計結果」平成 28 年(2016 年)11 月 21 日、4 ページ

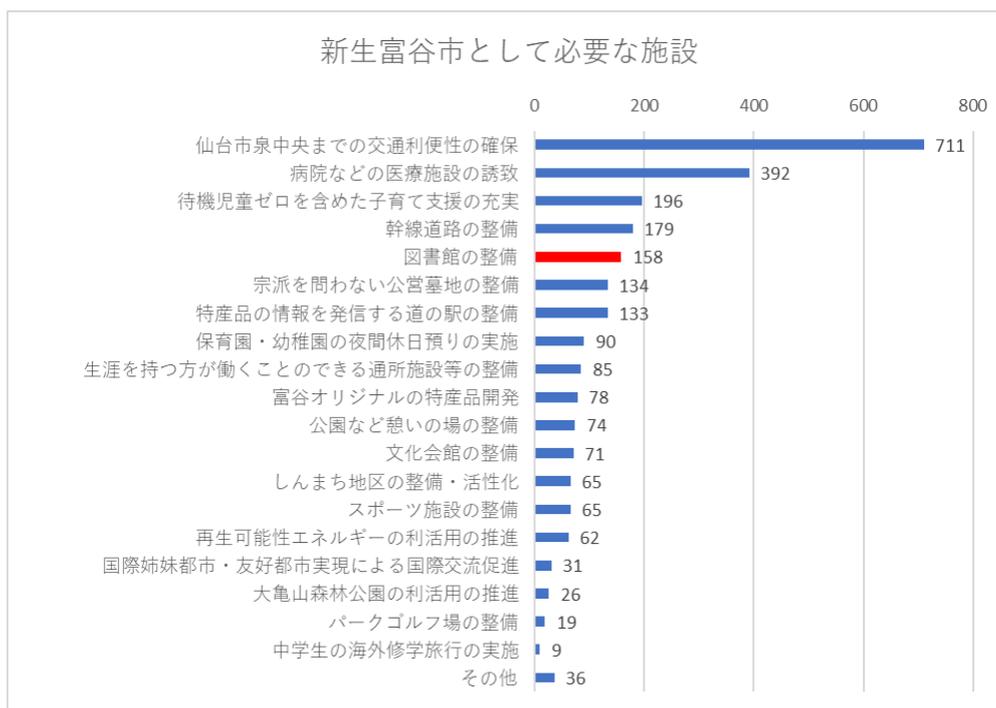
同調査の中で「新生富谷市として必要な施策」を聞いたところ 5 番目に「図書館の整備」があげられており、住民の図書館に対する期待の高さがうかがえます。

¹ 富谷市「市になるための要件」(平成 28 年(2016 年)10 月 10 日更新)

[<https://www.tomiya-city.miyagi.jp/soshiki/kikakuseisaku/sisei9.html>](最終アクセス日:平成 29 年(2017 年)2 月 2 日)

² 富谷市「富谷町まちづくりアンケート集計結果」(平成 28 年(2016 年)11 月 21 日更新)

[<https://www.tomiya-city.miyagi.jp/uploaded/attachment/3542.pdf>](最終アクセス日:平成 29 年(2017 年)2 月 2 日)



〔出典〕富谷市「富谷町まちづくりアンケート集計結果」平成 28 年(2016 年)11 月 21 日、4 ページ

富谷市次世代型図書館づくりに向けた市民参加ワークショップ事業は、新図書館の基本構想・基本計画策定の前段階となる事業です。ワークショップの参加者が思い描くまちの未来と可能性を基とし、次世代図書館にあるべき姿、あるべき機能について考えていきます。

1.2. 富谷市総合計画前期基本計画（案）における図書館の位置づけ

平成 28 年(2016 年)10 月 10 日(月)に市制施行した富谷市で、新たな視点に立ったまちづくりをおこなうため平成 28 年度(2016 年度)を初年度とし、平成 37 年度(2025 年度)までの「富谷市総合計画」の策定が進められています。

第 2 編第 2 章あらゆる世代が生きがいを感じて暮らせるまちを創ります

2-1 生涯学習

《施策目標》

生涯にわたって創造性や個性が活きるまちづくり

《施策方針》

- ・ 市民の創造性や心豊かな人間性を育むための生涯教育環境の整備に努めていきます。
- ・ あらゆる世代の多様なニーズに的確に応じた学習機会を充実していきます。

〔出典〕富谷市「富谷市総合計画前期基本計画(案)」平成 29 年(2017 年)1 月 17 日更新、46 ページ

平成 28 年度(2016 年度)から平成 33 年度(2020 年度)のまでの 5 ㄱ年のまちづくりの方向性を示す「前期総合計画」素案の第 2 章第 2 編「あらゆる世代が生きがいを感じて暮らせるまちを創ります」の「2-1 生涯学習³」の項目に図書館についての言及があります。特に、施策目標の達成のため行われるべき活動を示した施策内容 1 で強く述べられています。

「施策内容 1:生涯学習活動拠点の整備」の中に「市立図書館の整備を進めるため、(仮称)富谷市図書館整備基本方針の策定を図り整備促進に努めます」と図書館整備について記載されています。また、この施策内容 1 が「最重点プロジェクト」として位置づけられています。

施策内容 1:生涯学習活動拠点の整備 【最重点プロジェクト】

- ・ すべての市民が親しみやすく使いやすく、そして自らが学ぶことで、「いきがい」や「心の豊かさ」を得る生涯学習の拠点として、また関係機関との連携や IT を活用した地域情報の拠点としての市立図書館の整備を進めるため、(仮称)富谷市図書館整備基本方針の策定を図り整備促進に努めます。
- ・ 生涯学習の拠点施設である公民館施設の保全・補修を計画的に進め、安全で快適な学習環境の提供に努めるとともに、市民の誰もが利用しやすい施設の環境整備に努めます。

〔出典〕富谷市「富谷市総合計画前期基本計画(案)」平成 29 年(2017 年)1 月 17 日更新、46 ページ

施策 1 に続いて記載されている、施策内容 2 には、市民の自主的な生涯学習活動を支援することや公民館に設置されている学校支援地域本部において、地域コーディネーターを中心に学校、家庭、地域と密着して生涯学習の実現を目指すことが述べられています。

施策内容 3 には学習プログラムの充実を通じて学習活動を支援するとともに、団塊の世代や高齢者にも対応した学習情報の提供や講座開催について書かれています。

最後の施策内容 4 は「生涯学習の成果還元の間づくり」として、「市民自らの意思による学習のもと、自己実現を図るとともに、生涯学習の成果が社会でより活かされ、生涯学習による市民同士の絆と交流がより深まり、住みたくなるまち富谷の実現を生涯学習の間から図ります」と述べられています。

上記のように「生涯学習」の項目では、公民館、学校、家庭、地域との連携を通じて、すべての人が享受できる学習プログラム(講座なども含む)が提供されることが記載されています。自主的に学んだ富谷市民が、自己の実現をし、住民同士の交流が生まれ、富谷市に暮らしてよかったという思いを生み出すことが求められています。

その実現のために、生涯学習の拠点となる図書館のあり方を市民とともに考えていく場となるのが、「富谷市次世代型図書館づくりに向けた市民参加ワークショップ事業」です。

³ 富谷市「富谷市総合計画前期基本計画(案)」平成 29 年(2017 年)1 月 17 日更新
〔<https://www.tomiya-city.miyagi.jp/uploaded/attachment/3538.pdf>〕(最終アクセス日:平成 29 年(2017 年)2 月 2 日)

1.3. 本事業の目的

富谷市のまちづくり将来像・基本理念である「『住みたくなるまち日本一』100年間ひとが増え続けるまち～村から町へ 町から市へ～」の実現に向け、市民の生涯学習の場、情報の拠点、未来をつくる場所である図書館のあり方を市民参加型で検討していきます。

市を代表する文化施設となる図書館について考える第一歩として市民参加のワークショップを実施し、市民の意向を知り、未来の図書館像への共通理解を深めます。

富谷市での豊かな暮らしを送るために文化環境としての遊びや学びの場はどうあるべきか、また地域の文化環境の核となる図書館はどのようにつくっていくべきか、どのように利用していけばよいかを住民が主体として参加するまちづくり・図書館づくりプログラム(ワークショップ)を通して、議論していきます。

2. 議論全体のまとめ

平成 28 年(2016 年)12 月 23 日(金)に富谷市武道場大会議室を会場に第 1 回市民参加ワークショップが、平成 29 年(2017 年)1 月 29 日(日)に第 2 回市民参加ワークショップが富谷市成田公民館でそれぞれ開催されました。また、同日平成 29 年(2017 年)1 月 29 日(日)には、富谷市成田公民館大ホールにて「富谷市の図書館を考えるシンポジウム」が開かれました。

第 2 章では、第 1 回、第 2 回市民参加ワークショップ及び「富谷市の図書館を考えるシンポジウム」で話し合われた議論全体の総論をまとめます。

2.1. 利用者

図書館は、年齢、性別、ライフスタイル、経済的状况に関係なくすべての人が利用できます。

2.2. 目的

図書館は、すべての人が自身の可能性を発見し、学習や情報を得ることでその可能性を高め、同じ関心やライフスタイルを持つ人とのつながりが生まれることで、富谷市での生活に生きがいを感じることでできる場として機能します。

2.3. 次世代型図書館に求められる役割

■ 市民が集うサードプレイスとしての図書館

自宅や職場・学校ではない、心地のよい第 3 の居場所をサードプレイスと呼びます。次世代型図書館は富谷市民や富谷市への来訪者が集うサードプレイスとなります。

なぜなら同じ団地で暮らす人以外との交流の機会が皆無に等しいが、同じ趣味や関心、課題がある人と知り合いたいというニーズがありました。

図書館で読み聞かせ会が開催されていると、子どもを連れた父親や母親が自然と集まるため、子育てに関する本を借りることができ、また読み聞かせ会の参加者同士で交流することで悩み相談ができます。転勤して富谷市に来たばかりなので知り合いがおらず、孤立・孤独を感じて子育てをしている人、一人暮らしの高齢者、両親とも共働きの子ども等、孤立・孤独を感じている人たちの受け皿に図書館はなりえます。

また障害者も気軽に来れるようにバリアフリーすることや、障害者の施設が図書館の中のカフェを運営することで就労の場を提供してはどうかという議論もありました。

■ 市民が主体性をもって課題発見・解決に取り組む拠点となる図書館

市民が抱えている課題発見・解決を、行政に頼るだけでなく市民が自発的・自主的に情報を得て、解決策を見つけ、解決に向けて取り組むための原動力の拠点になるのが次世代型図書館です。

シンポジウムの中で猪谷千香氏が「近年は市街地の活性化問題、福祉や介護、教育や子育て

ての問題等、行政だけでは解決できない課題が山積みである。最も住民に利用される図書館をコミュニティの場にする事で、住民が集い、話し合うことで課題解決への糸口が見いだせるのではないかと発言された通り、図書館は住民が行政に頼るだけでなく、自発的・自主的に課題の発見・解決に取り組む場所にもなります。

■ 世代のバトンが循環していく図書館

富谷市民が持っている知識や経験が、他に人に循環し、受け継がれ、その知識が活用されるために、人と人や人と情報が出会う場所が次世代型図書館です。

高齢者は自分が図書館で本を読んだり講座を受けて楽しんだりするだけでなく、若い人たちと一緒に学び、必要に応じていままでの人生経験、知識や技能を伝えていくことができます。このような「知」の循環を生み出せる場所に図書館はなりえます。

東日本大震災で家が被災したため富谷市に避難している子どもたち、シングルマザーやシングルファザーの子どもたちに学習支援を図書館で行えるのではないかと問題提起がワークショップでも見られました。そして将来、そこで学んだ子どもたちが大きくなり、今度は教える立場になることも予想されます。

シンポジウムの中で嶋田学氏が「これからは共有(シェア)、わけあうということがキーワードとなる。これからの時代は右肩上がりではなくなっている。この状況や環境の中で、人間同士の心の触れ合いを含めて、まちが持っている資源や価値をどう保っていくか、自立可能性を見出していくかが重要な視点となる」という発言がありました。

富谷市民一人ひとりが持つ、経験や知識、技能も、市の資源や価値です。図書館で共有(シェア)され、循環・伝承していくことで、経験や知識、技能が次世代を担う世代に届き、またその次世代が次の世代につないでいくという世代のバトンが循環していきます。

■ 新・旧交わる富谷市ならではの図書館

新興住宅地だけではなく、奥州街道の宿場町という新・旧交わる富谷市だからこそ、次世代型図書館は歴史を残し、次世代に伝える拠点となります。

ワークショップでしんまち地区のまち歩きをした際、最近富谷市に転居した参加者から、富谷市の歴史や方言、料理を知ること、富谷市での生活がもっと豊かなものになるという声がありました。

一例をあげると、富谷市に古くから残る富谷茶に関する資料の展示や富谷茶を生かしたお茶会、お菓子づくりのイベントを開催し、富谷市に転勤してきた家族や子どもたちに参加してもらうことで、郷土愛を深めるきっかけづくりにもなります。

■ 安心・安全に行ける図書館

次世代型図書館は市民が安心・安全を感じる場所になります。

道路状況等、周囲環境の整備だけではなく、建築の内部環境も合わせて整備していきます。図書館に向かう道の車幅や歩道の安全性の確保が求められます。また街灯などの照明も配慮

します。

富谷市民の中には、子どもが放課後一人で時間を過ごしている時に不審者が家に入っていないかと不安を抱えている共働きの家族もいることでしょう。適度に人の目がある図書館は、家族が子どもを安心して送れる場所です。

■ アクセスしやすい図書館

すべての人が図書館を利用するために、アクセスの手段を確保していきます。

図書館が富谷市のどこに設置されても、図書館の近くに暮らす人、遠くに住んでいる人が現れます。また、富谷市は車社会ですが、学生や高齢者等車を運転しない人たちが、図書館にアクセスできる方法を考えていきます。

解決策の一つとして「まち全体を図書館に」する構想が話し合われました。すでに図書館機能を兼ね備えている公民館図書室や学校図書館、まちの中にあるカフェや高齢者施設等と連携をして、どこにいても図書館の資料にアクセスできる環境をつくることも手段として考えられます。

次の第3章では、本第2章であげられたワークショップやシンポジウムで出た論点を考慮しながら「次世代型図書館」について議論を発展させていきます。

3. 【参考資料】次世代型図書館づくりに向けた市民参加ワークショップ報告書

3.1. ワークショップとは

ワークショップは、ヒアリングと異なります。ただ一方的に参加者が自分の意見を主張する場やあらかじめ定められた結論の合意の場ではありません。各人の個人的な希望・要望だけを主張する「わたしごと」ではなく、各人が主体性を持ちコラボレーション(協働・協同)によってアイデアを創り出す場となるワークショップのデザインを行いました。

複数の異なる立場のメンバーが、まち歩きという協働の作業を通じて富谷市の可能性や課題を発見し、相互コミュニケーションを取りながら「富谷市の可能性を伸ばし、課題を解決するために、どのような図書館があるとよいか」と、個人(わたしごと)ではなく、地域全体(私たちごと)としての意識を持つことができます。地域全体をよくするためにはどのような図書館にするべきかという大きな視点から考えるきっかけとなります。

市民が主体性を持ってワークショップに参加することで、図書館が整備された後も「地域づくりの理念や方向性を市民自らが決め、市民自らの手で地域をつくっていく」市民自治が促進されることが予想されます。

3.2. 市民参加ワークショップの位置づけ

今回の市民参加ワークショップにおいて2つの位置づけ・役割を持たせました。市民の主体的な協働と創造を生み出すことを意識してプログラムの組み立てを行いました。

- ・ 富谷市での暮らしを生き生きとしたものにするために、まなびの場として、情報発信の場として、創造の場として図書館はどうつながるべきか、また、施設をどのようにつくり、どのように利用していけばいいのかをみんなで考え関わり続けていくための契機となります
- ・ 市民が主体としてワークショップに参加し、地域の可能性を再発見することで、新しい図書館を地域に開いた形で創造していくためのエンジンとなります

3.3. 開催日程及び会場

本事業ではワークショップを2回開催しました。

	日時	会場
第1回	平成28年(2016年)12月23日(金) 13:00~16:30	富谷武道館 大会議室 まち歩き:富谷市しんまち地区、成田地区
第2回	平成29年(2017年)1月29日(日) 10:00~12:00	富谷市成田公民館 会議室

3.4. ワークショップのテーマ

各ワークショップにテーマを設けました。サブタイトルにあるように、第1回市民参加ワークショップは富谷市旧市街地のあるしんまち地区のまち歩きを行い、その後、新興住宅が並ぶ成田地区を車でまわりました。第2回目はまち歩きの結果を踏まえ、誰に、どのように図書館を使ってもらいたいのかを想像し、ストーリーとしてまとめる作業を行いました。

	日時
第1回 平成28年(2016年) 12月23日(金)	とみやのまちから考える「思い敬う」とみやワークショップ ～富谷のまちの歴史を歩きながら考えよう～
第2回 平成29年(2017年) 1月29日(日)	とみやのまちから考える「思い敬う」とみやワークショップ ～富谷市の新しい図書館から生まれていくわたしたちのストーリー～

3.5. 参加者

平成28年(2016年)12月23日(金)に行われた第1回市民参加ワークショップは参加者が18名、見学者が42名でした。第2回市民参加ワークショップは19名が参加、4名の見学者がありました。第2回市民参加ワークショップでは前回のワークショップの参加者が1名欠席になりましたが、新たに2名新規の参加者があり合計19名となりました。

	参加者	見学者
第1回 平成28年(2016年) 12月23日(金)	18名	42名
第2回 平成29年(2017年) 1月29日(日)	19名	4名

性別を見ると男性、女性ともに参加者がいました。参加者の割合としては女性の方が多かったのですが、ご自身のことはもちろん、家族や子どもが通う学校のこと等広い視野から図書館についての意見・発言をいただきました。

年代で見ると下は中学生から70代まで幅広い年齢層が参加し、みんなで行う協働作業を通じて各世代が考えや抱えている課題を全員で共有し、共通認識を持ちながら議論を進めることができました。

図書館は設置された後、何十年も使われる施設です。これから長い間、利用者として図書館を使い続けていく若い世代の市民参加ワークショップへの参加は重要な意味を持ちます。図書館運営への市民参加についても、計画段階から参加した若い世代は、継続的にかかわりを持ち続けてもらえることが予想されます。

第1回市民参加ワークショップ:平成28年(2016年)12月23日(金)

	10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代	合計
男性	2	0	0	0	0	1	1	4
	11.1%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	5.6%	5.6%	22.2%
女性	1	0	1	7	1	3	1	14
	5.6%	0.0%	5.6%	38.9%	5.6%	16.7%	5.6%	77.8%
合計	3	0	1	7	1	4	2	18
	16.7%	0.0%	5.6%	38.9%	5.6%	22.2%	11.1%	100.0%

第2回市民参加ワークショップ:平成29年(2017年)1月29日(日)

	10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代	合計
男性	1	0	1	0	0	2	1	5
	5.3%	0.0%	5.3%	0.0%	0.0%	10.5%	5.3%	26.3%
女性	1	0	0	8	1	4	0	14
	5.3%	0.0%	0.0%	42.1%	5.3%	21.1%	0.0%	73.7%
合計	2	0	1	8	1	6	1	19
	10.5%	0.0%	5.3%	42.1%	5.3%	31.6%	5.3%	100.0%

3.6. 第1回市民参加ワークショップ プログラム

平成29年(2017年)1月29日(日)

第1部:オリエンテーション

時間:13:00~14:10(40分)

- ・ 若生裕俊市長の挨拶(5分)
- ・ レクチャー「多様化する図書館」(20分)
全国の図書館の事例を紹介
- ・ オリエンテーション「本日のプログラムについて」(15分)



第2部：まち歩き

時間：14:10～15:30(100分)

- ・ 移動時間(10分)
- ・ 自己紹介(10分)
- ・ グループごとしんまち地区でまち歩きを行う。成田地区は車の中からまちを見ながら、まちの可能性(魅力)や課題を発見・再発見する
- ・ 発見・再発見した富谷市の可能性(魅力)や課題など気づいたことを、話し合いながら、写真を撮り、メモやスケッチに残していく(60分)
- ・ 移動時間(10分)

■市民ワークショップ：プログラム【基本的な流れ】



第3部：地図に記録する

時間：15:30～16:30(60分)

- ・ [グループワーク]付箋等を使って気づいたことを地図に記録していく(15分)
- ・ [グループワーク]地図を編集しながらチーム内で話し合い、気づいたことを共有する(25分)
- ・ 各グループで中間報告として発表(15分)
- ・ 若生裕俊市長からの講評(3分)
- ・ 菅原義一教育長からの挨拶(2分)



3.7. 第1回市民参加ワークショップ 議論のまとめ

参加者はA班とB班の2班に分けました。班のメンバーと一緒にまち歩きをして発見・再発見した富谷市の可能性や魅力、また課題を付箋に書き込みました。各自、その付箋の内容を発表しながら、地図にある該当する場所に貼る作業を行いました。

富谷市が抱える課題を解決するためだけではなく、まちの可能性や魅力をさらに伸ばし、残し、他の人に伝えるために図書館ができることはなにか、持つべき機能や役割について話し合いました。

A班の発表

1) 市民が集う場としての図書館

富谷市に「集いの場」ができれば、自分の居場所ができるだけでなく、同じ興味、関心を持った人とのつながりが生まれます。

富谷市は国道4号線沿いにショッピングセンターやレストランがあるため、自分たちが暮らしている団地と国道4号線沿いの店へは行くが、他の団地に行ったり交流をしたりする機会は皆無に等しいという声がありました。市民が集う場所としての図書館ができれば、同じ子育て世代のお父さん、お母さんの交流、お菓子づくり等の趣味のサークルづくり、読書会・勉強会等があれば、団地の住民同士以外の人とのつながりが生まれ、人間関係も広がるという話が出ました。



■ 市民が集う場としての図書館：付箋に書かれた「気づきのポイント」

- ・ 同じ団地で暮らす人以外と交流をする機会が皆無に等しい
- ・ 趣味や生活スタイルが同じ人同士で集まりたい
- ・ 読み聞かせが開かれていれば、子育て中のお父さん、お母さんが集まれる
- ・ 富谷市には場所がなく、仙台市の高校に通う学生は仙台市で勉強してから帰宅する
- ・ 乳幼児と一緒にいける場所があったら
- ・ 障害者も気軽に来れて、情報を得られたり時間を過ごしたりできる場所があったら
- ・ 団地の住民は、富谷市に昔から暮らす人との交流がない。年配の方から民話を聞く会等きっかけがあったら
- ・ お店が早い時間に閉まると仕事がある人はいけない。仕事をしている人がくることができる時間はいつかを考えなければ

2) 富谷市の歴史を知り、残し、伝える図書館

今回のワークショップは新興住宅地からの参加者が大多数を占めました。しんまち通りのまち歩きを通じて、富谷市は宿場町だということを知らなかった、世界に誇る日本酒の蔵元があることを初めて知ったという参加者がいました。

だからこそ富谷市の歴史や文化を知り、残し、子どもたちにも伝える拠点としての図書館のあり方が議論になりました。

■ 富谷市の歴史を知り、残し、伝える図書館：付箋に書かれた「気づきのポイント」

- ・ まちのルーツを知ることが出発点
- ・ 旧役場がしんまち通りにあったことを知らなかった
- ・ 古民家の利用を増やしたい
- ・ 歴史情報がたくさん残っている
- ・ 昭和初期以前の教科書等古い書物が残っている
- ・ 富谷宿で富谷市以外のお土産が売っていた。もっと富谷市のお土産を増やせたら
- ・ 富谷市が宿場町だったことを知らなかったしアピールしたい
- ・ 富谷村時代の「村歌」が残っていた
- ・ 富谷茶の存在を知らなかったし、まちおこしとして活用できないか
- ・ 富谷の伝統的な食文化を知りたい
- ・ 内ヶ崎酒造店は宮城県で一番古い酒蔵で、イギリスにも出展(インターナショナルワインチャレンジ 2007)していることを知らなかった
- ・ 図書館に富谷に係わる歴史的な美術品等展示するスペースがあるといい
- ・ 歴史を感じたけど、再度訪問したいと思う場所になるか疑問
- ・ メインストリートのわりにはさみしい印象
- ・ 英語での案内があったので、外国の人にも来てもらえれば



奥州街道の宿場町として歴史的建造物が残るしんまち地区

3) 安心・安全が確保されている図書館

しんまち地区を歩いていると車通りが多いのに道が狭かったため、歩きながら不安を覚えた参加者がいました。図書館ができる場所には広い歩道が整備されたり、防犯対策がなされたりする等、安心・安全が確保されることで、小さい子どもから高齢者まで安心して来られる施設となります。

■ 安心・安全が確保されている図書館：付箋に書かれた「気づきのポイント」

- ・ 歩道の安全性が確保されることが大切
- ・ 車が通る道は広くとってもらいたい
- ・ 街灯が少ないように思えた。暗いと、夜、図書館にくるのは不安になるのでは

4) アクセスしやすい図書館

富谷市は車社会ですが、反面学生や高齢者等車を運転しない人たちは、図書館ができたかどうかのように来られるのか議論になりました。駐車場の確保をどうするか、運転をしない人は市民バスを活用するのかアクセスについての話し合いになりました。

■ アクセスしやすい図書館：付箋に書かれた「気づきのポイント」

- ・ しんまち通りは駐車場が少ない。車社会なので駐車場が必要
- ・ 車を持っている世代は行ける
- ・ 学生や高齢者のためにバス等、別の交通手段の確保をしないといけないのでは

B 班の発表

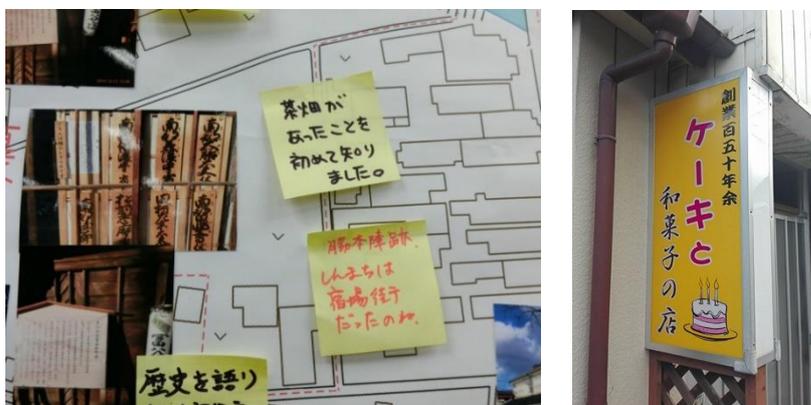
1) 新・旧交わる富谷市ならではの図書館

旧市街地の景観やそこに残る文化財を保存するだけでなく、若い人たちに伝え、共感してもらうための取り組みの重要性について話ができました。

■ 新・旧交わる富谷市ならではの図書館：付箋に書かれた「気づきのポイント」

- ・ 古き良き時代がよみがえるまち
- ・ 富谷宿は歴史を語り継ぐ場所
- ・ 富谷市のすばらしい景観を、足を運んで知ってもらいたい
- ・ 富谷茶について初めて知った
- ・ 富谷茶を使ったお菓子をつくる懐かしい感じのお菓子屋さんがある
- ・ 指定文化財はもっとガイドブック等で紹介したほうがいい
- ・ 前世代を大切に、次世代型図書館をつくる
- ・ 博物館や文書館の機能を持つ図書館
- ・ 昔の道具を保存し、伝える場所があってもよい
- ・ 若い世代のとみやっこに共感されつつ後世につなげるまちになるには

- ・ 歴史を勉強できるコーナーやワークショップ、語り部のイベント等で情報発信ができるのでは



富谷茶を使ったお菓子を作るケーキと和菓子の店は創業 150 年余りの老舗

2) サードプレイスとしての図書館

コミュニティにおいて、自宅や職場とは隔離された、心地のよい第 3 の居場所をサードプレイスと呼びます。富谷市で暮らす子どもから高齢者まで、気軽に集える第 3 の居場所づくりについて議論になりました。

また付箋には書かれていませんが、すでに活発に活動を行っている公民館図書室との連携の必要性の話にもなりました。

■ サードプレイスとしての図書館：付箋に書かれた気づきのポイント

- ・ 商店街沿いに理容店が 3~4 軒もある。理容店は人が集まるサードプレイス
- ・ 江戸時代は髪結いの店に人々がつどい情報交換をした
- ・ 地域コミュニティに図書館がなるのでは
- ・ 若者が自分の住む場所に興味を持つようなまちづくりの場になったら
- ・ 子どもたちの居場所となるには、見守りが必要
- ・ 古民家再生。古民家を使って定年退職後、起業したい人がいるのでは

3) まち全体を図書館に

図書館が建設される地区の人だけが喜ぶ施設にならないようにするには、図書館と富谷市にあるカフェ等の店舗と連携して「富谷市まるごと図書館」の仕組みがつかれないか話し合いになりました。しんまち地区の古民家を利用したカフェを見て得られたアイデアでした。

■ まち全体を図書館に：付箋に書かれた気づきのポイント

- ・ おしゃれなカフェがあった。図書館と富谷市にあるカフェ等とで連携していけばよいのでは
- ・ 図書館の建物は 1 ヶ所につくられるが、その後の展開を市全体で行ってもよい
- ・ まち全体でトータルコーディネーションをする



3.8. 第2回市民参加ワークショップ プログラム

開催日:平成29年(2017年)1月29日(日)

第1部:オリエンテーション

時間:10:00~10:15(15分)

- ・ 開会のアナウンス(3分)

A班が作成した「気づきのポイント」が貼られた地図

B班が作成した地図

第2部:ストーリーづくり

時間:10:15~11:30(75分)

- ・ [個人ワーク]ストーリーづくり
「富谷市の新しい図書館から生まれていくわたしたちのストーリー」(15分)
- ・ [グループワーク]ストーリーの発表(35分)
[グループワーク]ストーリー選び(15分)
- ・ 休憩(10分)

第3部:ストーリーの発表

時間:11:30~12:00(30分)

- ・ [全体]作成した地図とストーリーボードを使って「まちと本と図書館をテーマに発表する(15分)
- ・ [全体]各チームの発表に対して参加者全員でインタラクティブに意見交換する(10分)
- ・ 荒谷敏教育次長からの講評と挨拶(3分)
- ・ 記念撮影(2分)

3.9. ストーリーボード

ストーリーボードに利用者モデル、背景、利用体験ストーリー、その他の欄があります。

- ・ 利用者モデル:どんな人が利用するのか想定する
 - ・ 背景:利用者モデルの人のライフスタイル、家族構成、考えていること、悩んでいること
 - ・ 利用体験ストーリー:利用者モデルの人が、図書館に来るとどのような体験ができるのか、どのような思いを持つのか、生活が変わるのか
- を記載していきます。

■市民ワークショップ:ストーリーボード【第2回】

利用者モデル	定年退職した夫と2人で暮らす女性
背景	子どもたちも家庭を持ち、県外で仕事をしています。子育てと家事に追われていましたが、自分の時間を持てるようになりました。夫と旅行をしたり、新しいことに挑戦してみたいと思っています。
利用体験ストーリー ※スケッチも可	旅行に行きたいと思っていますが、どこに行けばいいのか迷ってしまいます。図書館に行けば、国内外の観光に関する本が置かれているので、夫と一緒に図書館に行けば、本を手に取り計画を立てています。ガイドブックだけではなく、その土地出身の作家の小説や旅のエッセイを読めるのも楽しいですね。 また図書館の生活のコーナーで見つけたビーズ細工の本を借りました。小さいビーズの穴に糸を通す作業は今期がいますが、頭や目を使うので、脳の刺激もあり、いいエクササイズになっています。また富谷市にもビーズ細工をみんなでつくるサークルを見つけ、メンバーになりました。今度、図書館で作品展を行う予定です。 お正月に富谷市に里帰りしてきた息子の子どもたちがビーズ細工を見て「おばあちゃん、すごきれい」と目を輝かせながらいってくれました。子ども向けの本もあったので、孫と一緒にビーズでブローチを作りました。 この年になって趣味が持てて、お友達ができました。また家族の中のコミュニケーションのきっかけにもなっているのが嬉しいです。
その他	

3.10. 第2回市民参加ワークショップ 議論のまとめ

ワークショップの時間、各参加者が1~2枚のストーリーを書きました。班で発表してもらい、そこから代表的なストーリーをみんなで選び、全員の前で発表しました。

A班の発表

A班は利用者モデルや背景についての議論を通じて、0歳の赤ちゃんから定年退職後も豊かな生活を送りたい高齢者まで「生涯を通じて、どのライフステージにいても利用できる施設」であるという結論に至りました。

また図書館ができると、自分たちが暮らしている富谷市の歴史・文化、生活や学習のために必要な情報を得られることはもちろん、育児という共通のライフスタイルや釣りやサッカー等、共通の趣味を持った人とつながりを持つきっかけが生まれることが予想されます。

地元のことを知り、また富谷市での生活が豊かになることで、富谷市民としての誇りや郷土愛が芽生え、富谷市での生活を続けていこうという気持ちが喚起されるという議論にもなりました。

A 班の発表

- タイトル:生涯を通じて利用できる「おらほ」の図書館

10 代のストーリー

利用モデル	市外の学校に通う学生
背景	学校と家が遠く、そのうえ、図書館がないため休日などに学習できるスペースがない
利用体験ストーリー ※スケッチも可	<p>市内に図書館ができたことで、学習することが可能となった。また、普段、市外の学校に行っていると、地元(富谷)のことについてふれることがないが、図書館に行くことで知らなかった地元のことについて知ることができ、郷土愛が芽生えるなど、地元に関わった仕事もよいのではないかと考えるきっかけになった。</p> <p>県外、市外から引っ越して来た人の子どもが多く、地元で高校が 1 校しかない中で、地元について知れるのはよいことだと思う。市外に人が出ていくかもしれないのを、止めることができるのではないか。</p>
その他	

40 代のストーリー

利用モデル	最近、大阪から富谷市に引っ越してきた 40 代前半の女性
背景	大阪ではボランティアで小学校などにお話や絵本の読み聞かせをしていた。家族は小学生と中学生の息子 2 人と、釣り好きの会社員の夫の 4 人
利用体験ストーリー ※スケッチも可	<p>引っ越してきて方言や食文化の違いに少し戸惑っていた。富谷でも引き続き、お話ボランティアをしたいと思っていた。近所の人に、図書館ができたと聞いたので、行ってみることにした。</p> <p>宮城県の方言や食文化について知りたいことを、図書館職員に尋ねると資料を親切に提供してくれた。</p> <p>小学校の息子はサッカー、中学生の息子は高校進学、夫の釣り好きもあるので、家族を連れてきて、各々、自分の興味の資料を探すことになった。その時も職員がていねいに接してくれた。</p> <p>とてもサービスのよい職員がいる図書館だからこそ、また行きたいと思う。</p> <p>小学生の息子は、調べ学習で学校の図書室には資料が少なく、市立図書館にはたくさんあるので市立図書館と学校図書館の連携ができればさらに学習支援につながると思う。</p>

その他	歴史散策、育児に関するイベント、育児の支え合い、実験教室
-----	------------------------------

60代のストーリー

利用モデル	退職時期の男性
背景	高齢者の定義がさだかではない状態
利用体験ストーリー ※スケッチも可	いかに退職後の人生を迎えるか。有意義な生き方をしたい。次の人生を設計するための学習ができる場があればと願います。長い人生を最高にしたい多くの人々がいます。できるだけたくさんの方が社会に貢献できるような場がくれたらと思います。
その他	

B班の発表

図書館はすべての世代にすべての世代に開かれる場所です。B班の発表では、「孤独」「一人ぼっち」の解消のために図書館が役に立つのではないかという議論がありました。

親が共働きなので放課後一人で時間を過ごす子ども、一人暮らしの高齢者、また富谷市に転居してきたが知り合いもいず孤立した状態で子育てをしているのでストレスを感じている母親らの「居場所」になりえます。さらに生涯学習の拠点として、ボランティアによる子どもたちへの学習の機会の提供、講座やイベントが開催され同じ関心を持った人たちが集い情報交換やネットワーク構築が行われ「ともに学習する」環境づくりがされることが議論されました。

- タイトル:すべての世代に希望と可能性を!

みんなで学ぶ! みんなで美味しいものを食べる!

利用モデル	子ども、老人
背景	・家に帰宅しても、親が共働きで不在。一人で過ごす子ども ・一人暮らしで話相手がいない老人
利用体験ストーリー ※スケッチも可	図書館に併設して、こども食堂を設けることにより、読書会や話し合いの場、また夕食を共にして孤独な時間をなくしてあげることができるのではないか。 塾(学生ボランティア、元教師)の方が子どもに勉強を教える場の設置
その他	参考:こども食堂

みんなで子育て、一人じゃないって楽しいね

利用モデル	転居してきた子育て中の若い家族
背景	新居を求めて富谷市に転居。近隣に知り合いもなく孤立しがち

利用体験ストーリー ※スケッチも可	図書館において本の貸出だけでなく、子育て情報、サークル活動、読み聞かせなどをやっている情報を得て、同世代、あるいは世代を超えた交流がはじまり、不安もなく暮らすことができた。 幼稚園情報なども先輩ママさんからきけたら嬉しいですね。歴史、文化にもふれてみたい。
その他	

利用モデル	小さな子どもを持つ母親
背景	24 時間、子どもとつきっきりの母親が、息抜きをしたいと思っている
利用体験ストーリー ※スケッチも可	どこに行っても周りの目を気にして、ストレスをためている。子どもを本やおもちゃで安心して遊ばせて、自分も本を読んだり、お茶をのんで一息つける場所がほしいと思っている。 子どもを見てくれて、(よみきかせ、おもちゃ)うるさくしても他の人に迷惑がかからない部屋(託児付き、ランチできるカフェコーナー付、子育てサポート利用)がある図書館なら安心できる！

世代を越えて楽しめる図書館

利用モデル	孫(5歳、女兒)と一緒に図書館に来るのが楽しみな60代女性
背景	近所に住む孫が毎週末遊びに来てくれます。本好きなのは嬉しいのですが、好きな本を買ってあげたいのですが、何の本が好きなかわかりません。
利用体験ストーリー ※スケッチも可	富谷市立図書館の児童コーナーにはテーマ別の絵本がわかりやすく分類されています。同居していなくても保護者がいれば、子どもの図書カードをつくることができ、孫は自分のカードで好きな本がたくさん選べて、大喜び。以前より本を大事に扱うようになりました。
その他	

全参加者が書いたストーリーボードは、添付資料に掲載しています。

3.11. 広報活動

ワークショップへの参加者を募るため、広報誌等を使った広報活動を行いました。

	広報活動
<p>第 1 回 平成 28 年(2016 年) 12 月 23 日(金)</p>	<ul style="list-style-type: none"> 平成 28 年(2016 年)11 月 29 日(火)の 11 月定例記者会見で市長がワークショップ開催をアナウンス 「広報とみや」平成 28 年 12 月号への掲載 富谷市のウェブサイト「富谷市次世代型図書館づくりに向けた市民参加ワークショップ」として告知掲載(平成 29 年(2017 年)2 月 3 日現在、リンク切れ) 富谷市の Facebook を活用した告知 富谷市の Twitter に告知掲載 富谷市教育委員及び公民館図書指導員には個別に教育委員会からワークショップのことを伝えて参加を呼びかける 事業受託者のウェブサイト告知掲載 事業受託者の Facebook に告知掲載
<p>第 2 回 平成 29 年(2017 年) 1 月 29 日(日)</p>	<ul style="list-style-type: none"> 富谷市のウェブサイト告知掲載(2017 年 2 月 3 日現在、リンク切れ) 事業受託者のウェブサイト告知掲載 事業受託者の Facebook に告知掲載

富谷市次世代型図書館づくりに向けた市民参加ワークショップ開催

富谷市の次世代型図書館づくりに向けて考える第一歩として、市民参加のワークショップを開催します。市民であればどなたでも参加できます。

富谷の次世代型図書館をどのようにつくっていくべきかなどを市民皆さんと共に考えていきたいと思っております。

なお、ワークショップは公開制で行いますので、傍聴を希望される方は当日会場までお越しください。(申し込み不要)

【日時】12月23日(金)
午後1時30分～午後4時30分

【会場】富谷武道館 大会議室

【対象】市内在住の方

【人数】30名以内
(申し込み多数の場合は抽選)

【申込】12月15日(木)まで生涯学習課へ電話で申し込みください。

☎ 生涯学習課 生涯学習担当
022-358-5400

富谷市
2016年12月11日

富谷市次世代型図書館づくりに向けた市民参加ワークショップの開催について。

富谷市の次世代型図書館づくりに向けて考える第一歩として、市民参加のワークショップを開催します。市民の皆さんと共に考えたいと思いますのでぜひ申し込みをお願いします。

◆日時 平成28年12月23日(金)
午後1時30分～

◆場所 富谷武道館・会議室

◆対象 市民の皆さん(何方でも参加できます)

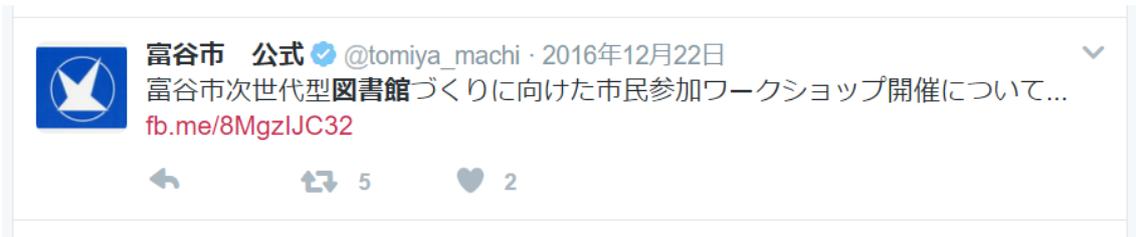
◆申込 生涯学習課まで電話で申込。
電話022-358-5400
※締め切りは12月15日までです。
皆さんの申し込み心からお待ちしております。

右)富谷市 Facebook:平成 28 年(2016 年)12 月 11 日(日)

<https://www.facebook.com/tomiya.seikatu/posts/726894830806891>

左)「広報とみや平成 28 年 12 月号」22 ページ

<https://www.tomiya-city.miyagi.jp/uploaded/attachment/3728.pdf>



富谷市 Twitter: 平成 28 年(2016 年)12 月 22 日(木)

https://twitter.com/tomiya_machi/status/811827562708168704

なお、早速12月23日(金)の13:30～16:30に第1回のワークショップが開催されます。ぜひご参加ください。

「富谷市次世代型図書館づくりに向けた市民参加ワークショップ開催について」(富谷市、2016-12-06)

<https://www.tomiya-city.miyagi.jp/.../next-generation-library...>

「人口増加自治体・総合ランキング2010-15-1位は富谷町(宮城県)」(新公民連携最前線、2016-05024)

<http://www.nikkeibp.co.jp/atcl/tk/PPP/042300038/051900005/>

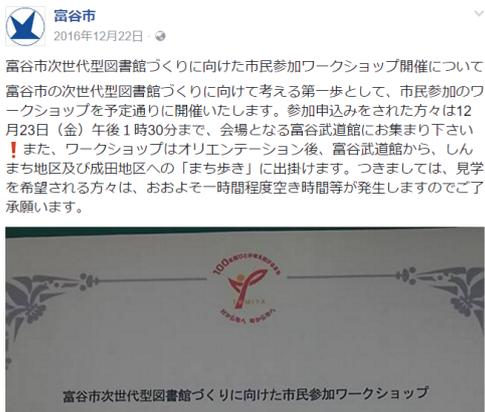


事業受託者のウェブサイト: 平成 28 年(2016 年)12 月 12 日(月)

<http://arg-corp.jp/2016/12/12/tomiya/>

3.12. お知らせ

第 1 回市民参加ワークショップ開催の前日に、市の Facebook に参加者と見学者に向けた当日のお知らせが投稿されました。



富谷市 Facebook: 平成 28 年(2016 年)12 月 22 日(木)

<https://www.facebook.com/tomiya.seikatu/posts/733126816850359:0>

3.13. 報告

第1回市民参加ワークショップ:平成28年(2016年)12月23日(金)



富谷市さんが写真3件を追加しました。

2016年12月23日 · 🌐

本日、富谷武道館において「富谷市次世代型図書館づくりに向けた市民参加ワークショップ」が開催されました。一般公募で参加申込みをいただいた方々が出席し、グループワークを行っています。次回の開催は年明け1月29日(日)成田公民館においてシンポジウムとワークショップを行います。詳しくは広報とみや1月号をご覧ください。



富谷市 Facebook: 平成28年(2016年)12月23日(金)

<https://www.facebook.com/tomiya.seikatsu/posts/733587613470946>

第2回市民参加ワークショップ:平成29年(2017年)1月29日(日)



富谷市さんが写真3件を追加しました。

1月29日 10:12 · 🌐

本日、成田公民館において「富谷市の図書館を考えるシンポジウム」が午後2時より開催いたします。宮城大学事業構想学部長の風見先生を始め、全国で図書館づくりに活躍されている先生をお迎えし富谷の次世代型図書館づくりについて若生市長を交えたパネルディスカッションが行われます。図書館に関心のある多くの市民の皆様のご来場を心からお待ちしております。

※詳細は別添をご覧ください！

※シンポジウムに先立ち午前中には第2回ワークショップが開催されています。



富谷市 Facebook:平成29年(2017年)1月29日(日)

<https://www.facebook.com/tomiya.seikatsu/posts/753855574777483>



「広報とみや」平成 28 年 12 月号 4 ページ、5 ページ

3.14. メディア掲載

「広報とみや」等、富谷市の媒体だけではなく、外部のメディアである河北新報に告知やワークショップの報告が記事として掲載されました。

第 1 回市民参加ワークショップ:平成 28 年(2016 年)12 月 23 日(金)

- ・ 「建設検討の富谷市図書館 歴史・風情生かして 意見交換会に市民 18 人」
河北新報:平成 28 年(2016 年)12 月 24 日(土)朝刊

4. 【参考資料】 富谷市の図書館を考えるシンポジウム報告書

4.1. 開催日程及び会場

開催日： 2017 年 1 月 29 日(日)14:00～16:00

会場： 富谷市成田公民館大ホール

4.2. シンポジウムのタイトル

富谷市の図書館を考えるシンポジウム

4.3. 当日のプログラム

13:30 受付

14:00 開会

※司会・進行 岡本真

(アカデミック・リソース・ガイド株式会社代表取締役／プロデューサー)

14:05(4 分) 若生裕俊市長挨拶

14:09(1 分) 浅野幹雄富谷市議会議長挨拶

14:10(20 分) 講話 1「市民とつながる図書館」(猪谷千香氏)

14:30(20 分) 講話 2「瀬戸内市民図書館ができるまで、できてから」(嶋田学氏)

14:50(20 分) 講話 3「田園都市論とコミュニティビジネスの融合による森の図書館の創造」
(風見正三氏)

15:10(10 分) 休憩(会場設営変更)

15:20(35 分) パネルディスカッション(市長・猪谷氏、嶋田氏、風見氏)

15:55(5 分) 菅原義一教育長から閉会の挨拶

4.4. 登壇者

■ 猪谷千香(いがや・ちか)氏 (文筆家、ハフィントンポスト日本版記者)

明治大学大学院博士前期課程考古学専修終了。産経新聞で長野支局記者、文化部記者などを経た後、ドワンゴコンテンツでニコニコ動画のニュースを担当。2013 年 5 月よりソーシャルニュースメディア「ハフィントンポスト」日本版で公共図書館や地方自治について取材している。著書『つながる図書館:コミュニティの核をめざす試み』(ちくま新書、2014 年)、『町の未来をこの手でつくる 紫波町オガールプロジェクト』(幻冬舎、2016 年)著者

▽「ハフィントンポスト」猪谷千香氏が執筆した記事一覧

<http://www.huffingtonpost.jp/chika-igaya/>

■ 嶋田学(しまだ・まなぶ)氏(岡山県瀬戸内市民図書館もみわ広場館長)

1963 年、大阪生まれ。1987 年から豊中市立図書館で勤務。1998 年、人口 6,500 人の図書館のない町に図書館を創るという仕事に魅力を感じ滋賀県旧永源寺町図書館準備室に移籍。2005 年

の市町村合併の後、八日市図書館、能登川図書館などに勤務し、2009年に再び永源寺図書館に戻る。2006年に同社社科大学大学院総合政策科学研究科に入学、公共政策としての図書館、ソーシャルキャピタルとの親和性をテーマに研究を進めた。その後、同志社大学政策学部の嘱託講師、京都学園大学非常勤講師、日本図書館研究会の「図書館界」編集委員を務める。2011年4月、瀬戸内市に転籍。新図書館開設準備室長として図書館整備に携わる。「持ち寄り・見つけ・分け合う広場」をメインコンセプトに、「基本計画」を策定。2013年度に設計を開始し、2016年6月1日に瀬戸内市民図書館もみわ広場として開館した。2016年12月11日、開館半年で来館者が10万人を突破した。

▽瀬戸内市民図書館のウェブサイト

<https://lib.city.setouchi.lg.jp/>

■ 風見正三(かざみ・しょうぞう)氏 (宮城大学教授、同事業構想学部長兼事業構想学研究科長)

1960年生まれ。日本大学大学院理工学研究科博士課程前期修了後、財団系シンクタンクで地域振興計画に関する調査研究業務等に従事。その後、1987年、総合建設会社に入社し、全国の都市・地域開発業務などに従事する。1991年、英国国立ロンドン大学大学院に留学し、都市地域計画学修士、経営学修士を取得するとともに、「地球サミット」のロンドン部会に出席する。帰国後は、地域プランナーとして様々な地域活性化プロジェクトに関わる。2007年、東京工業大学大学院総合理工学研究科環境理工学創造専攻博士後期課程修了、「都市の環境持続可能性指標の開発に関する研究」にて、博士号(工学)を授与される。同論文に関連した学術論文にて、2006年度日本不動産学会・学会賞(論文賞)を受賞する。2008年4月から、宮城大学事業構想学部教授に就任。全国の都市再生、地域再生、環境共生のプロジェクトや都市政策、環境政策、ソーシャルビジネス、コミュニティビジネスに関する調査研究に携わっている。社会活動としては、政府、地方自治体の調査委員会や審議会の委員等を歴任しながら、持続可能な地域づくりと地域産業創造、コモンズ社会の創造に積極的に取り組んでいる。2011年4月から2012年3月まで、宮城大学地域連携センター副センター長に就任し、南三陸町震災復興計画の策定支援の他、様々な震災復興支援活動を行ってきている。現在、東松島市の被災した小学校を「森の学校」として再建するプロジェクトをC.W.ニコル氏と共に進めているとともに、コモンズの視点とコミュニティビジネスの手法から様々な持続可能な地域創造プロジェクトの実践を進めている。2012年4月から2016年3月まで宮城大学事業構想学部副学部長を務め、2016年4月より宮城大学事業構想学部学部長・宮城大学大学院事業構想学研究科長に就任。現在に至る。

▽上記プロフィールは「風見研究室」のウェブサイトより抜粋

<http://kazamilab.com/professor/>

■ 司会・進行: 岡本真(おかもと・まこと)

1973年生まれ。1997年、国際基督教大学(ICU)卒業。編集者等を経て、1999年、ヤフー株式会社に入社。Yahoo!カテゴリ、Yahoo!検索等の企画・運用に従事した後、2004年にはYahoo!知恵袋を企画・設計を担当。Yahoo JAPAN研究所の設立やYahoo!ラボの公開に関与。

2009年に同社を退職し、1998年に創刊したメールマガジン ACADEMIC RESOURCE GUIDE(ARG)(週刊/5000部)を母体に、アカデミック・リソース・ガイド株式会社を設立。「学問を生かす社会へ」をビジョンに掲げ、富山市、恩納村(沖縄県)、須賀川市(福島県)、名取市(宮城県)、長崎県等において新図書館等の文化機関の整備に関わりつつ、ウェブ業界を中心とした産官学連携に従事。近年のプロデュース事例として、協働・創発型オフィス「さくらWORKS<関内>」、来訪型町屋シェアハウス「鍵屋荘」、東日本大震災に伴う博物館、図書館、文書館、公民館の被災・支援情報集約のための「saveMLAK」、ユーザー参加型研究の世界の実現を図る「ニコニコ学会β」等がある。なお、国立情報学研究所産学連携研究員、早稲田大学 IT バイオ・マイニング研究所招聘研究員を兼任。また、「あのひと検索 SPYSEE」、クラウドファンディングサービス「READYFOR?」(現在は分社化)を運営するオーマ株式会社の代表取締役を兼任。著書に『未来の図書館、はじめませんか?』(青弓社、2014年)、『これからホームページをつくる研究者のために』(築地書館、2006年)、『ウェブでの<伝わる>文章の書き方』(講談社現代新書、2012年)、共編著に『ブックビジネス 2.0』(実業之日本社、2010年)ほか。

4.5. 参加者

178名

4.6. 講演内容

6.6.1. 若生裕俊市長挨拶

富谷市では市民との座談会、アンケートを通じて声をきいている。その中でも、図書館の建設を求める声が寄せられている。実際、長年、多くの人から図書館を求める声はあったが、宮城県図書館が近隣にあるので、なかなか着手ができなかった。公民館に図書室をつくり、ご利用をいただいていたが、市制移行にあたり、改めて図書館という文化施設を求める声があがった

まちづくりを計画するにあたって、新しい図書館をつくるにしても、市民が望む図書館づくりが必要だと考えている。そして声をいただくだけではなく、完成した後も市民が主体となって運営に関わってもらえるような、新しいまちの図書館ができればと考えている。

6.6.2. 「市民とつながる図書館」猪谷千香氏

近年は、貸出だけではない「市民とつながる」図書館が増えている。2015年7月に複合施設として開館した岐阜市にある「みんなの森 ぎふメディアコスモス」は、ホールやスタジオなどを併設した滞在型図書館である。開館1年で123万人が来館した。40代以下の利用も5割以上と多い。図書館で問題となるのが赤ちゃんなどの泣き声が聞こえるとクレームをつける利用者があることだが、ぎふメディアコスモスでは「子どもの声は未来の声」ととらえ、クレームが来ても「子どもの声は響くけど、市民で温かく見守って育てていきましょう」と説明している。図書館の中にある傘の下に人々が集うスペースがある。

佐賀県の伊万里市民図書館は、1995年に市民からの要望により開館した。設計段階から市民の声をていねいにヒアリングした。たとえば、コンセントが床ではなく、壁に設置されている部屋がある。これは市民が「布絵本など縫物をするときミシンを使いたい」という声があったから壁に設置された。設計や図書館員では、利用者の動きがわからないこともある。ヒアリングをすることで、ニーズに合った設計を行うことができる。現在も市民ボランティア 400人が図書館の活動に携わり、イベントの開催など運営の支援もしている。

富谷市の状況に近いと思われるのは富山県の舟橋村で、人口増加率は県内 1 位、子どもの人口比率が 21.8%と日本一(2010年)となっている。日本で一番面積が小さい自治体(3.47km²)である。図書館は駅舎と併設している。住民一人当たりの貸出数は 33.6冊で2013年度のデータでは日本一の貸出数となっている。これだけ利用者が多いのも、図書館の職員が図書館に来る子どもたち全員の名前と顔を覚えているので、子どもが来るとその子の名前で声をかけている。また行政の図書館の活動への参加も活発で、村長や村役場の職員も子どもたちへの読み聞かせを実践している。

近年は市街地の活性化問題、福祉や介護、教育や子育ての問題など行政だけでは解決できない課題が山積みである。最も住民に利用される図書館をコミュニティの場にするすることで、住民が集い、話し合うことで課題解決への糸口が見いだせるのではないか。家庭、職場、学校ではない第 3 の場所「サードプレイス」を人々は求めている。

注目されている図書館の一つに岩手県紫波町が取り組む紫波町オガールプロジェクトがある。補助金に頼らない公民連携で駅前町有地を開発した。2012年から2016年に大型施設 4 棟を整備した。広場はランドスケープデザイナーだけでなく町民もワークショップに参加してデザインされた。循環型まちづくりを進め食料自給率が 170%となっている。図書館も農業支援サービスを展開している。

市民とつながる図書館になるためには、日常の積み重ねが大切である。どれだけ図書館の外の人たちに共感を持ってもらい、味方してもらえるかを考えていくとよい。

6.6.3. 「瀬戸内市民図書館ができるまで、できてから」 嶋田学氏

岡山県瀬戸内市は 2004 年 11 月に邑久町、長船町、牛窓町が合併して誕生した人口約 38,000 人の市である。

図書館ができるまでは、住民 1 人当たりの蔵書数・貸出冊数は県下ワースト 1 であった。2011 年 5 月に「新瀬戸内市立図書館整備基本構想」を策定した。同年 10 月に瀬戸内市の全保育園、幼稚園に移動図書館車を巡回させた。子どもたちが本を借りて家に持っていくことで、子どもの保護者が図書館について認識を持ってもらえる。子どもにとっても小さい頃から本に親しむことで、生涯にわたる読書習慣につながっていく。

図書館の設置にあたり市民参画による計画策定「としょかんみらいミーティング」を開催した。「しあわせ実感都市 瀬戸内」を実現するために図書館にできること」と題したシンポジウムを開催したり、広報誌で呼びかけたりして子どもたちに図書館づくりの企画段階から参加してもらう

場を設けた。

新瀬戸内市図書館基本計画のメインコンセプトは「もちより・みつけ・わけあう広場」となり、各単語の頭文字を取って「みもわ広場」と名づけた。

瀬戸内市の図書館が目指すもの

- ・もちより
市民がそれぞれの「暮らし」や「仕事」「学び」や「楽しみ」「生きがい」などの「必要」を持ち寄り
- ・みつけ
その「必要」に応えた図書館の資料・情報・事業を別の市民が「これは私の必要」と見つけ
- ・わけあう
市民がこうした機会を互いに分け合う「広場」

また瀬戸内市民図書館が目指す7つの指針をまとめた。

～7つの指針～

- ・市民が夢を語り、可能性を拡げる広場
- ・コミュニティづくりに役立つ広場
- ・子どもの成長を支え、子育てを応援する広場
- ・高齢者の輝きを大事にする広場
- ・文化・芸術との出会いを生む広場
- ・すべての住民の居場所としての広場
- ・瀬戸内市の魅力を発見し、発信する広場

図書館の中に郷土資料「せとうち発見の道」という地域郷土資料のスペースが整備されています。また図書館の中の書架と一体となった展示架や床下展示など、図書館の本とものを融合させながら展示している。瀬戸内市が誇る国際的な糸操り人形作家、竹田喜之助を顕彰するギャラリーも図書館の中にある。

図書館の南側の壁は寒風陶芸会館とのコラボレーションにより、市民のみなさんがメッセージや絵を描いた手づくりの3,200枚以上の寒風タイルが貼られている。これも市民参加の活動の一つであった。

インターネット上に「せとうち・ふるさとアーカイブ」や「せとうちデジタルフォトマップ」を公開している。写真の投稿等も呼びかけている。

図書館が開館してから1日平均730人が来館している。開館から約半年で10万人を達成した。市民の16%が本の貸出利用をしている。

また市民の集いの場として、平日の午前中は高齢者や若い母親と子どもたち、午後は小学生から高校生まで、学生が利用している。週末や祝日は家族連れ、学生、高齢者など多様な市民

が来館している。

瀬戸内市民図書館みもわ広場が目指すのは「市民がそれぞれの思いの中で、主体的に価値創造をする日常をつくること」である。子どもとの時間を楽しく過ごすための工夫、在宅介護のスキル向上など、市民が当事者意識(オーナーシップ)をもって、課題解決のために取り組むための手伝いを図書館はしていく。

更に「ゆったりとした時間を過ごせることによるこころのゆとり、豊かさの享受」を通じて、「対話、交流による価値観、展望、課題の共有化が図られる契機の醸成」されることにより、「精神的な安寧と思考の活性化」につながると信じている。

図書館だけではなく、行政、NPO・まちづくりのキーパーソン、個人利用の住民、外部アクターなど様々なステークホルダーとネットワークづくりをしながら、図書館の運営を進めていきたい。

6.6.4. 「田園都市論とコミュニティビジネスの融合による森の図書館の創造」 風見正三氏

田園都市とは 1902 年ごろに、近代都市計画の祖と言われるイギリスのエベネザー・ハワードが発表した構想である。当時のイギリスは産業革命の影響で公害が問題となり、人々の健康を脅かしていた。そこでハワードは、都市と農村の良さを融合させた「田園都市」をつくらうと考えた。

田園都市は同心円状に計画されている。中心に公園や商店街がある。その周りにオフィスなど仕事をする場所がある。さらに周辺に住宅街があり、外側には緑地帯が広がる。中心ににぎわいがあり、外に行くにつれ田園地帯が広がっている。

都市のにぎやかさと農村の自然環境がひとつのまちの中にある。社会と自然とつながりながら、地域の豊かさを共創していくのが田園都市のコンセプトである。

Trend of the New Capitalism
Co-Creation of Regional Welfare
Social Innovation and Natural Capitalism
地域の豊かさの共創
社会と共に・自然と共に

東日本大震災で大きな被害を受けた宮城県東松島市で「森をもう一度再生させたい」という声が上がった。被害の大きかった野蒜地区にある小学校が森の中に移転することになり、それを「森の学校」として再建しようという話になった。長野県ですばらしい森を再生した作家の C.W. ニコル氏に協力をしてもらい、私の研究室で「森の学校」の基本構想、基本計画の取りまとめを行った。子どもたちが森の中で生きる力を育んでもらいたい。

富谷市も豊かな森に囲まれた田園都市である。今後のまちづくりを通じて、豊かさの共創がなされることを願っている。

4.7. 次世代型図書館とは

平成29年(2017年)に行われた「富谷市の新しい図書館を考えるシンポジウム」の中で、登壇した講師から「次世代型図書館とは何か」という提言がありました。

各講師からのコメントを発言順にまとめます。

■ 風見正三氏(宮城大学教授、同事業構想学部長兼事業構想学研究科長)

図書館だけではなく人間は、今までのものを変えてきた歴史がある。基本となるのは住民の人たちが富谷市にはどんなものが必要なのか、どのような図書館が必要かという視点である。

図書館は本が並んでいる場だけではなく、地元のマーケットがあってもいいかもしれない、仕事が生まれる場所、地域の人たちにとっての未来をつくる場になるかもしれない。

住民の人たちの願いを、図書館という機能に変えていくためにどうすればよいか考え、話し合うべき。その先に、地域の特性、個性のある図書館が生まれる。

■ 猪谷千香氏(文筆家、ハフィントンポスト日本版記者)

次世代という言葉聞いてハード面だけを考えるべきではない。機材等は5年もすれば古くなる。

次世代型図書館をつくるための必要不可欠なのは、新しい社会に対応できる図書館の職員を育てられる図書館になれるかどうか。図書館によっては、年代別でサービスを展開しようとしているところもある。10代でも、30代でも、60代でも、色々なライフスタイルを抱えているし、個々のニーズは違う。年代だけで切ってしまうと彼らのニーズや実態とずれてしまう。

社会の動きにアンテナを張って、感じ取って、それを実際のフロントのサービスで展開できるような職員がいる図書館こそ、次世代型図書館である。

■ 嶋田学氏(岡山県瀬戸内市民図書館もみわ広場館長)

これからは共有(シェア)、わけあうということがキーワードとなる。これからの時代は右肩上がりではなくなっている。この状況や環境の中で、人間同士の心の触れ合いを含めて、まちが持っている資源や価値をどう保っていくか、自立可能性を見出していくかが重要な視点となる。そのためにも共有が必要となるのではないか。

■ 若生裕俊市長

次世代型図書館は決して単に電子化というイメージではない。これまでの図書館の概念ではなく、新しい時代にあった、新しい次につながる、新しい価値観を持った図書館をつくりたいという願いを込めて「次世代型」と表現をしている。

基本的としてある図書館法はしっかりと堅持しつつ、新しい図書館を目指していきたい。

図書館の中で本を借りる、読むだけの場所ではなく、居場所を求める声が多く届いている。市民は空間を必要としている、富谷市はすぐ近くに宮城県図書館という大きな施設がある。この立地条件を生かして、この時代の、次の世代とつながっていく図書館をつくりたい。そして市民のみ

なさんと一緒につくり、運営にも関わってもらえるような図書館にしたい。

4.8. 広報活動

- ・ 「広報とみや」平成 29 年 1 月号への掲載
- ・ 平成 29 年(2017 年)1 月 12 日(木)付で菅原義一教育長より富谷市議会議員及び区長へ案内状を送付
- ・ 富谷市のウェブサイトと Facebook に告知掲載
- ・ 事業受託者のウェブサイト、Facebook、メールマガジンに告知掲載



富谷市 Facebook:平成 29 年(2017 年)1 月 28 日(土)

<https://www.facebook.com/tomiya.seikatu/posts/753571814805859:0>

4.9. メディア掲載

- ・ 「図書館と地域の在り方考える 29 日、富谷でシンポ」
河北新報 朝刊:平成 29 年(2017 年)1 月 24 日(火)
- ・ 「住民が必要な機能は 富谷で図書館考えるシンポ 市長と専門家らに在り方議論」
河北新報 朝刊:平成 29 年(2017 年)1 月 30 日(月)朝刊

5. 添付資料

5.1. ストーリーボード

平成 29 年(2017 年)1 月 29 日(日)に行われた第 2 回市民参加ワークショップで、参加者全員が書いたストーリーボードを添付資料として示します。

A 班

利用モデル	市外の学校に通う学生
背景	学校と家が遠く、そのうえ、図書館がないため休日などに学習できるスペースがない
利用体験ストーリー ※スケッチも可	<p>市内に図書館ができたことで、学習することが可能となった。また、普段、市外の学校に行っていると、地元(富谷)のことについてふれることがないが、図書館に行くことで知らなかった地元のことについて知ることができ、郷土愛が芽生えるなど、地元に関わった仕事もよいのではないかとかんがえるきっかけになった。</p> <p>県外、市外から引っ越して来た人の子どもが多く、地元で高校が 1 校しかない中で、地元について知れるのはよいことだと思う。市外に人が出ていくかもしれないのを、止めることができるのではないかな。</p>

利用モデル	最近、大阪から富谷市に引っ越してきた 40 代前半の女性
背景	大阪ではボランティアで小学校などにお話や絵本の読み聞かせをしていた。家族は小学生と中学生の息子 2 人と、釣り好きの会社員の夫の 4 人
利用体験ストーリー ※スケッチも可	<p>引っ越してきて方言や食文化の違いに少し戸惑っていた。富谷でも引き続き、お話ボランティアをしたいと思っていた。近所の人に、図書館ができたと聞いたので、行ってみることにした。</p> <p>宮城県の方言や食文化について知りたいことを、図書館職員に尋ねると資料を親切に提供してくれた。</p> <p>小学校の息子はサッカー、中学生の息子は高校進学、夫の釣り好きもあるので、家族を連れてきて、各々、自分の興味の資料を探すことになった。その時も職員がていねいに接してくれた。</p> <p>とてもサービスのよい職員がいる図書館だからこそ、また行きたいと思う。</p> <p>小学生の息子は、調べ学習で学校の図書室には資料が少なく、市立図書館にはたくさんあるので市立図書館と学校図書館の連携ができればさらに学習支援につながると思う。</p>

その他	歴史散策、育児に関するイベント、育児の支え合い、実験教室
-----	------------------------------

利用モデル	退職時期の男性
背景	高齢者の定義がさだかではない状態
利用体験ストーリー ※スケッチも可	いかに退職後の人生を迎えるか。有意義な生き方をしたい。設計するための学習ができる場があればと願います。長い人生を最高にしたい多くの人々がいます。できるだけたくさんの方々が社会に貢献できるような場が作れたらと思います。

利用モデル	一度も利用したことのない50代男性
背景	普段は忙しく、図書館の利用がない。特に興味があることもない。休日、暇ができたので何となく立ち寄る。家族は各々忙しいため、休日は一人
利用体験ストーリー ※スケッチも可	図書館の利用は、子どもや若い母親が多いと思っていた。内装もかわいらしいので、行きにくかった。 休日で時間ができたため立ち寄る。男性の趣味を広げる本の展示コーナーがあり、陶芸に関する本を手にする。 別室で作品展示もしているという。行ってみれば同世代の人が見に来ていて、同じ趣味を持つ友人ができる。活動的に！
その他	書道、歴史を学ぶ、男の料理

利用モデル	68歳。65歳までサラリーマン。現在妻と二人
背景	東北の古代史に興味がありより深く知識を得、次のステップとして中世史にも挑戦したい
利用体験ストーリー ※スケッチも可	郷土史も含めた古代、中世の歴史書の並んだ書棚をかたっぱしから読み、自分なりの歴史本を編集作成することをライフワークとする。 図書館主催の歴史講座や歴史散策にも積極的に参加したい。やっぱり「おらほの図書館」は素晴らしい。

利用モデル	2歳の子どもがいる主婦
背景	平日はいつも子ども2人きりで家にいても煮詰まるので、子連れで行って楽しめる場所を探している
利用体験ストーリー ※スケッチも可	<p>子どもの絵本を借りに行った図書館で、読み聞かせのイベントがあるのを知り参加してみた。</p> <p>何回か参加するうちに、顔見知りも増え、子育てのことなど気軽に話せる息抜きの場になった。</p> <p>1年が経ち子どもが幼稚園に通うようになって自分の時間ができてからは読み聞かせでできた友人と図書館で開催されるイベントのボランティアとして活動。ライフステージの中で状況が変化しても図書館と関わりたいと思っている。</p>

利用モデル	妊婦さん（20～30代、女性）
背景	はじめての育児に不安や期待が大きい 実家は遠い。お友達もまだあまりいない
利用体験ストーリー ※スケッチも可	<p>育児に関する本を探しに来てみたら、先輩mamaが紹介する「妊婦さんのうちにやっておくとよいこと」が紹介されていた。それに関する本やワークショップもあることがわかった。夫婦で参加できるらしく、パパ向けの育児本も紹介されていた。</p> <p>生まれたBabyとの遊びかた、すごしかたがわかる参加できるイベントもあり、妊婦さん支援の育児サークルの場であった。じぶんもやってみようかな……！</p>

利用モデル	大学生（18歳～）
背景	<ul style="list-style-type: none"> ・あまり図書館を利用しない ・研究やレポートに追われて忙しい
利用体験ストーリー ※スケッチも可	<p>レポートなどの課題をやりたいけど「カフェの長時間利用ができない！」、「家だとなまける！」、「毎回大学まで行くのは遠いし時間がかかる！」ということで地元の図書館を利用。</p> <p>長時間の作業もでき、お金もかかからず、なおかつ資料が手に入るという利点が多いので、今後も利用しようかなあ……。</p> <p>それがきっかけで、他の利用目的で図書館を利用したり、知らなかった富谷の歴史を知ることができて地元のよさを再確認！</p>

利用モデル	小学生(中～高学年)
背景	・親の帰りが遅い ・放課後は友達と遊ぶけれどゲームばかり
利用体験ストーリー ※スケッチも可	図書館に実験教室のようなものがあつたら小学生がたくさん来て楽しめそう！(本を読む場所だけでは興味を持たなそうなので) ゲームばかりでは目も悪くなるし、あまり自分のためにならない。でも実験教室で知的好奇心アップ。それがきっかけで本にも興味をもてる(かも) 公園などの野外で遊ばれるよりも、大人の目が行き届いた図書館の方が親も安心。

利用モデル	子育て真っ最中の女性
背景	毎日家事、育児で、自分で本を読む時間がない
利用体験ストーリー ※スケッチも可	図書館で子どもに本の読み聞かせをしてもらっている間、ボランティアの人に子どもを預かってもらったので、自分が以前から読みたかった本を少しずつ読めた。 地域の人の手を借りながら、自分も子どもも本と親しむ時間を持つようになった。

利用モデル	本の中の登場人物の評価討論会
背景	
利用体験ストーリー ※スケッチも可	1人の登場人物を様々な人々の目で、どの様な評価ができるのか討論しあう場の提供

B 班

利用モデル	子ども、老人
背景	・家に帰宅しても、親が共働きで不在。一人で過ごす子ども ・一人暮らしで話相手がいない老人
利用体験ストーリー ※スケッチも可	図書館に併設して、子ども食堂を設けることにより、読書会や話し合いの場、また夕食を共にして孤独な時間をなくしてあげることができるのではないか。 塾(学生ボランティア、元教師)の方が子どもに勉強を教える場の設置
その他	参考:子ども食堂

利用モデル	転居してきた子育て中の若い家族
背景	新居を求めて富谷市に転居。近隣に知り合いもなく孤立しがち
利用体験ストーリー ※スケッチも可	<p>図書館において本の貸出だけでなく、子育て情報、サークル活動、読み聞かせなどをやっている情報を得、同世代、あるいは世代を超えた交流がはじまり、不安もなく暮らすことができた。</p> <p>幼稚園情報なども先輩ママさんからきけたら嬉しいですね。歴史、文化にもふれてみたい。</p>

利用モデル	小さな子どもを持つ母親
背景	24 時間、子どもとつきっきりの母親が、息抜きをしたいと思っている
利用体験ストーリー ※スケッチも可	<p>どこに行っても周りの目を気にして、ストレスをためている。子どもを本やおもちゃで安心して遊ばせて、自分も本を読んだり、お茶をのんで一息つける場所がほしいと思っている。</p> <p>子どもを見てくれて、(よみきかせ、おもちゃ)うるさくしても他の人に迷惑がかからない部屋(託児付き、ランチできるカフェコーナー付、子育てサポート利用)がある図書館なら安心できる！</p>

利用モデル	孫(5 歳、女兒)と一緒に図書館に来るのが楽しみな 60 代女性
背景	近所に住む孫が毎週末遊びに来てくれます。本好きなのは嬉しいのですが、好きな本を買ってあげたいのですが、何の本が好きなかわかりません。
利用体験ストーリー ※スケッチも可	<p>富谷市立図書館の児童コーナーにはテーマ別の絵本がわかりやすく分類されています。同居していなくても保護者がいれば、子どもの図書カードを作ることができて、孫は自分のカードで好きな本がたくさん選べて、大喜び。以前より本を大事に扱うようになりました。</p>

利用モデル	まちづくりに興味のある学生
背景	旅行の趣味から、それぞれのまちの歴史や風景をいかしたまちづくりに興味を持ち、そのような仕事ができたらと考えている
利用体験ストーリー ※スケッチも可	<p>まずは自分のまちを知ろうと、図書館に足を運んだところ、歴史や街並みについて詳しく展示されたコーナーがあった。自分の住んでいる富谷は新しいだけではなく、歴史ある場所だったことを知り、地元に関わる仕事もしたいという志がめばえた。</p>

利用モデル	子ども
背景	震災後に富谷に引っ越した被災地の子どもたちやシングルマザーやファザーに育てられている子どもたちの勉強の場
利用体験ストーリー ※スケッチも可	塾に行く経済的ゆとりがない家庭の子どもたちが図書館で教えてくれるボランティアの学生(教師を目指している)、元教師の大人に教えてもらうことで、勉強できる機会を与える。教えてもらった子供たちが、学生になり、また子どもたちを教えることで、つながりが生まれる。

利用モデル	富谷市在住の外国人を友とする高校生
背景	日頃ギブ・アンド・テークでお互いの言葉の教え合いの中で「ハンシャク」の意味が伝えられない
利用体験ストーリー ※スケッチも可	本屋でありとあらゆる日本語の辞書を使って調べたが、日本人としてもつ語感をきちっと押さえた、外国人が理解できる説明をしているものが、皆無であった。図書館へでも行くと母にいわれて、数十冊の日本語辞典を並べてようやく、その外国人へ説明できる意味を確認できた。

利用モデル	新しい自動車を購入しようとしている富谷市に住む娘(25歳)
背景	勤務を開始して、通勤の便と休日の遊びを考えて
利用体験ストーリー ※スケッチも可	どんな車を買うか、各業者を長期間かけ歩きまわったがますます迷ってしまった。ある日、父に尋ね、それなら図書館へ行ってみたらといわれて、次の休日に出かけたら、悩み事は一切解決されて、自分にぴったりのものを選ぶことができた。(図書館には何があったのか?は後日談)

利用モデル	子育て中のお母さんたち
背景	育児が忙しいと、人とのかかわりが少なくなり、なかなか外にでる機会が少なくて……。
利用体験ストーリー ※スケッチも可	健診などで利用する市役所の掲示板でのお知らせ。 親子で楽しめる講座の紹介(子どもと一緒に参加できる) ヨガ、アロマセラピー、絵本の読み方(選び方)、富谷茶を楽しむ会

利用モデル	資料作りをお願いされた新入社員(20代前半)
背景	上司に新しい仕事の資料をまとめるようにお願いされたものの、資料の集め方やまとめ方がわからず……。
利用体験ストーリー ※スケッチも可	資料といえば本。本といえば本屋だが、お金もない。では図書館に行こうと思い立つ。司書さんに関連する本や、情報の整理の本を教えてもらい、まとめて借りることができた。資料もしっかり作れたので上司にもほめられた。 おさいふにも優しい図書館。ついでに目にとまった料理本も借り、作ってみた。

利用モデル	夫が単身赴任で自宅で一人である時間が多い主婦(30~40代)
背景	夫は転勤族、日中子どもは学校へ。 家事を終え空いた時間を何か役立つことへ挑戦してみたいと思った。
利用体験ストーリー ※スケッチも可	市内で買い物をしていたら「富谷市立図書館」でボランティアを募集していた。「自分にできるかな？」と不安も大きかったけれど、図書館という空間が大好きで、チャレンジしてみようと申し込んだ。 ちゃんと研修もあり、担当者もサポートしてくださり、活動の中で友人もできた。今では、生活の一部となり充実している。

利用モデル	30代前半の共働き夫婦(子どもはいない)
背景	ふたりとも読書好きだが仕事がハードで、通常は(最近)は読書の時間が取れない。休日には、休養が中心になってしまっている
利用体験ストーリー ※スケッチも可	「身近な場所に図書館ができた」、「しかも夜まで開館している」と聞いて、休日の過ごし方を本来好きだった読書にあてようとふたりで出かける先として、図書館に向かった。そこではそれぞれが好きな分野や共通のものも再発見し意識も変わってきたように思う。 仕事と自宅の往復の中、自分たちが住んでいるまちへの意識が高まり、また、いつしか憩いの場になっていたことを感じている。

利用モデル	主婦(50代)パート
背景	何かやりたいけど、何をしたいのか?
利用体験ストーリー ※スケッチも可	子育ても落ちついてきた。自分の時間を充実していきたい。図書館でクラフトのワークショップをするというチラシを見て参加。やってみると楽しいし、新しい友達もできた。本を借り練習し、友達と作品展を開催するまでに。一般の本屋にない本は、他の図書館から借りることができ、毎日楽しくチャレンジし、可能性を広げることができている。

利用モデル	共働きの両親と小学生の娘
背景	一人でいることが多い娘を心配して、放課後過ごす場所として図書館を両親がすすめた。読んだ本のお話を夕食時にしてほしいという願いを伝えて。
利用体験ストーリー ※スケッチも可	もともと本を読むことが好きだった女の子は、いろいろ読み、その話を夕食時に伝えることが楽しみとなった。 またよく来る女の子を気にかけて、図書館見守りボランティアの方が声をかけてくれたり、イベントの知らせをしてくれるようになり、ある時、富谷の歴史についての話を聞く会に参加。それはその後、市とコラボして富谷めぐりが企画されていたイベントで、両親も誘い家族で参加。住んでいるまちに家族で愛着や興味を抱ききっかけとなった。

利用モデル	定年退職後の夫(60代)
背景	毎日することもなく家に居て、妻にうとましがられいたたまれず、ふらっと図書館へ行ってみた
利用体験ストーリー ※スケッチも可	図書館で何とはなしに本を眺めていたら「男性のお料理教室」というポスターが目にとまり応募した。図書館近くの公民館の調理場でサークルに通ううち友人が増え、自分の楽しみが増えた。 簡単なものも作れるようになり、安心して妻が外出できるようになった。

利用モデル	読書が大好きな50代の女性(車イス利用者)
背景	図書館が大好きな女性は、数年前までは車で何カ所もの図書館めぐりをするほど読書好きです。去年あたりから足を悪くして、車イス利用になってしまい、図書館の利用回数もぐんと減少
利用体験ストーリー ※スケッチも可	新しくできた富谷市立図書館はバリアフリーで車イス利用者にも、利用しやすく助かっています。何より低書架になっていて、車イス利用者でも上段に手が届く高さ90cmほどになっていて、職員の手を借りなくても自分で本を手にとって選ぶことができるので、利用回数も増えています。また、利用者以外でも食事ができるレストランも授産施設運営になっていて、ゆっくり過ごせます。

利用モデル	かつて子育てを一緒にしていた母親仲間
背景	50代～60代となり、仕事を持つ人も、専業している人も、時折集い、語らいの場を持ちたいと考えている
利用体験ストーリー ※スケッチも可	一緒に語らいたいと思っても、なかなか自由に長く利用できる場所が難しい。 今現在これからの磨きをかけたいと思う年代となり、知の宝庫である図書館に誰もが利用できるフリースペースがあったらいいなあと思っていたので、ありがたい場所になりました。

利用モデル	中高生
背景	
利用体験ストーリー ※スケッチも可	学校と連携、演劇など発表の場、富谷をアピールする外国向けポスターや動画、コンクール、図書館を使って調べる(まち歩き、バスツアー)、学生でも行きやすい安全な場所

利用モデル	勉強に不安を持つ学生
背景	学校や家に居場所がない
利用体験ストーリー ※スケッチも可	勉強する専用ルーム→アドバイザー(見守りボランティア)、ネット、動画、見放題

利用モデル	退職した高齢者
背景	これからの時間をどう過ごすか考えている
利用体験ストーリー ※スケッチも可	趣味の本を探しに来た→ワークショップ→あつまり(情報を得る場)